

11 和束町福塚古墳の埋葬施設と埴輪

鈴木康大・廣瀬覚・菱田哲郎

1. 遺跡の立地と調査の経緯

遺跡の立地 福塚古墳は、和束町大字園字箕田（これまで小字大塚とされてきたが箕田が正しい）に所在し、和束天満宮の西に隣接する。現況は草木が生い茂る小山を呈しており、周囲には、茶畑、水田、民家がとりまいている。和束天満宮は、北から延びる尾根の上に位置しており、これが和束川沿いに形成される盆地の東を限るように見える。この和束天満宮の周囲に、福塚古墳のほか、原山古墳（大字原山小字西手）や園大塚古墳（大字園字大塚）がかつて存在し、古墳群を形成していたが、盆地の東を限るといふ地形上の特徴が、古墳の立地の背景にあると考えられる。

調査の経緯 福塚古墳は、和束町内で現存する数少ない古墳であるとして、注目されてきた。『和束町史』第1巻では、「中期の古墳と推定される」としている（乾 1995）が、これは『京都府遺跡地図』の遺跡の概要欄に「台地 径 25 m 高 5 m 2 段築 北東崖面に石室露出 竪穴式石室 幅 0.7 m 古墳中期」とある（京都府教育委員会 1985）のを受けていると思われる。この状況はその後とも変わりなく、『和束地域の歴史と文化遺産』において和束川流域の古墳をまとめた際にも、石室の露出を確認し、前期に遡る可能性を記した（菱田 2015）。

そして、町史編さん事業が開始したことを受け、町内に残された貴重な古墳であることから、測量調査を実施することとした。2019年7月と2020年1月に調査を実施し、その成果については、『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6集に「和束町和束天満宮周辺における考古学的調査」として発表している（京都府立大学文学部考古学研究室 2020）。そこで示したように、方墳の可能性も否定しきれないが、直径 24 m、高さ 5.8 m の円墳に復原できる。一方、2020年1月の調査時以降、この古墳で埴輪を採集することができ、年代についての新たな手がかりを得ることができた。また、露出していた埋葬施設についても、埴輪



図1 福塚古墳 2020年1月の調査風景

が示す時期と合わせて考える必要があるため、改めて検討を加えることとなった。本稿は、これらについての検討成果をとりまとめている。その際、埴輪の位置づけにあたっては、奈良文化財研究所の廣瀬覚氏からご教示を賜り、かつ原稿も頂戴することができた。記して謝意を表したい。なお、採集した埴輪については、相楽東部広域連合教育委員会と相談の上、文化財保護法の手続きである発見届を提出し、また露出していた埋葬施設についても、現状は土嚢等による被覆によって保護されている。(菱田哲郎)

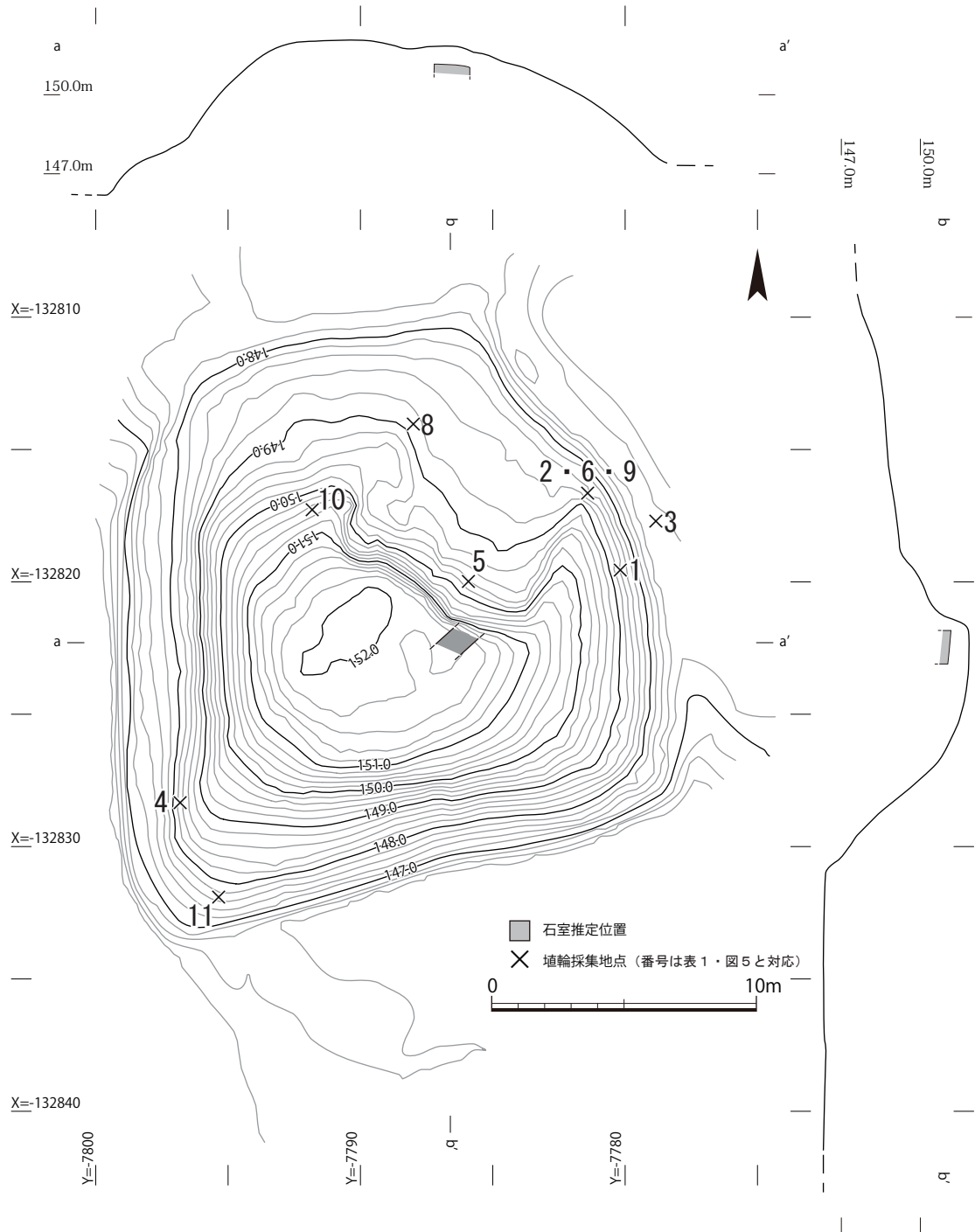


図2 福塚古墳墳丘と埴輪採集地点 (S=1/250)

2. 埋葬施設の検討

石室の状況 福塚古墳の北東側は、過去の採土によって大きく削られており、その崖面（標高151 m付近）では石室の一部が露出している。2020年3月3日に、石室の露出状況を記録するため、実測図の作成をおこなった。

石室の露出範囲は、幅約1.5 m、高さ（最も低位の石材下辺から天井石上面まで）約0.6 m、奥行き約0.9 mで、天井石上面の標高は151.3 mを測る。露出部の状況から石室の小口上端部が露出しているものと推測される。天井石2枚と左右両側壁が部分的に確認でき、両側壁間の距離は0.6～0.8 mを測る。露出部手前の天井石は、長径1.0 m、中径0.7 m、短径0.3 mの扁平な石材であり、長径方向を側壁に直交する形で架構されている。側壁は、長径0.2～0.6 mで扁平な石材を積み上げて構築される。天井石の状況から、断面に見えている天井石は側壁より転落しているものと考えられる。また、石室周辺の土層を確認したところ、粘土層の堆積は確認できなかった。

上述の観察に加え、ピンポールを用いて地下の状況を探ったところ、開口部から北東方向に約1 mまでの範囲と南西方向に約2.4 mまでの範囲において石にあたる感触が得られた。その結果、主軸はおおよそ北東 - 南西に傾くことがわかる。また、北東方向で確認された石上面の標高は149.8 mにあたり、天井石下面までの垂直距離は0.9 mを測る。ピンポールで確認された石が仮に石室に伴うものであれば、石室は長さ3.4 m以上、高さ0.9 m以上と推測することができる。

石室は、墳丘の中心よりやや南東に位置し、墳丘北西部にはやや広い空間が生じる。このことから、別の埋葬施設の存在が想定されたものの、崖面の土層観察からは埋葬施設の存在は確認できなかった。また、石室上面は墳頂部より約1 mの深さに位置し、墳丘においてやや高所に石室が位置している。

石室石材 石室の石材については、橋本清一氏（元京都府立山城郷土資料館）より以下のようなご教示を得た。天井石は少し熱変成を受けたチャートで、側壁は少し熱変成を受けたもしくは非熱変成の頁岩～粘板岩を主とし1石のみチャートであることが認められる。また、石室の崩落石と推測される石材には、少し熱変成を受けたもしくは非熱変成の頁岩～粘板岩や、堇青石等の鉱物が肉眼観察されるホルンフェルスがみられる。

上述した特徴をもつチャートは、福塚古墳から1 kmほど北東、和束川上流の河原に多くみられる。また、本古墳より0.5 kmほど東北東の河原では極端にその数が減ることから、福塚古墳よりやや上流の和束川の河原で河床礫を採取した可能性が高い。

側壁や崩落石でみられた頁岩～粘板岩、ホルンフェルスについては、和束盆地南端では領家帯北端の新期花崗岩類が分布しているため、それより北側で採取されたものと考えられる。石室でみられる石材には、角張るものと丸みを帯びた河床礫が混在することから、福塚古墳より0.5～1 kmほど離れた和束川本流や支流河川だけでなく、崖錐、段丘礫層からも採取されたものと推測される。なお、福塚古墳に隣接する天満宮の北東端の高さ1～2 mの崖には、非熱変成か少し熱変成した頁岩～粘板岩の岩盤が狭く露出するほか、福塚古墳の北～北北西100～200 m以西にも同質の岩石が分布する。また、段丘礫層は福塚古墳から天満宮にかけても



図3 福塚古墳の石室露出部の状況（北東から）

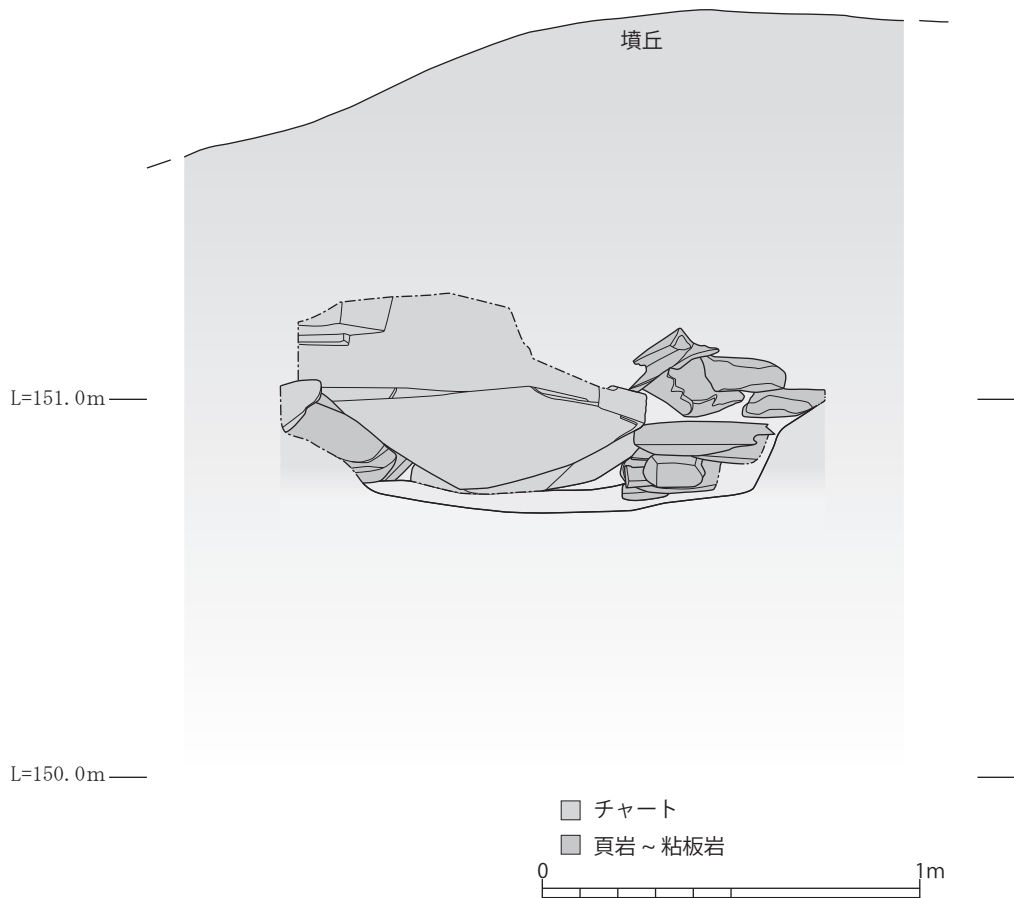


図4 石室露出部実測図(S=1/20)

分布しているが、薄層で、ほとんど崖がみられないため、詳細な観察は難しい。

石室構造 露出部の状況のみからでは、竪穴式石室か横穴式石室かを判断することは難しい。ただし、扁平な石材が側壁に用いられていることから、一般的な横穴式石室である可能性は低いと思われる。また、石室の位置が墳丘の比較的高所に位置し、そこから水平に接続する羨道の存在を想定することも難しいことから、横穴式石室ではなく、竪穴系の埋葬施設である可能性を考えておきたい。

後述する埴輪の年代から福塚古墳は6世紀前半の古墳と考えられるため、同時期における木津川中流域の古墳の状況をみておこう。木津川中流域では、天竺堂1号墳を嚆矢とし、5世紀

末には横穴式石室が導入されている（中島 2017）。一方で、同時期には竪穴式横口式石室もしくは竪穴形小石室が椿井遺跡（6世紀前半）や加茂盆地に位置する草ヶ山1号墳（未発掘、時期不詳）において確認されている。また、福塚古墳よりもやや早い時期になるが、車谷42号墳のように木棺直葬の主体部と竪穴系小石室が併置される事例も認められている。このように、木津川中流域では5世紀末から6世紀前半にかけて多様な埋葬施設が認められ、その変遷が必ずしも一様でないことがわかる。これらの事例から福塚古墳の石室構造を特定することは難しいが、横穴式石室が導入される一方で、竪穴系の埋葬施設が構築される時期の所産として評価する必要がある。

3. 採集埴輪

調査時およびその後の踏査に際し、埴輪片11点と中世土師皿1点を採集した（表1）。ここでは、埴輪について紹介する（図5・6）。

埴輪片は図2にある×印で示した地点において採集された。原位置を保っているとは考えにくく、埴輪頂部に樹立されていた埴輪が転落してきたものと推測される。破片はすべて小片であり、全形をうかがうことのできる資料はないが、円筒埴輪片9点、形象埴輪片2点が採集され、形象埴輪片のうち1点は蓋形埴輪である。

1～9は円筒埴輪である。いずれも焼成は良好で、黒斑はみられない。1は、残存部の最大径21.2cm、器壁の厚さは0.9～1.3cm（突帯部で1.4～1.5cm）を測る。外面調整は1次調整のタテハケのみで、内面は縦方向のナデ調整の後にタテハケをほどこす。突帯の突出度は低く、断面形状は潰れたM字形を呈する。突帯下位の段には、円形透孔が確認できる。2は、外面に底部調整の痕跡が残ることから、最下段から2段目にかけての破片であるとみられる。残存部の最大径20.0cm、器壁の厚さは1.6～2.7cm（突帯部で4.0cm）を測り、2段目には円形透孔を穿つ。外面は一次調整のタテハケのみで、底部調整は不明瞭ながら、板オサエの痕跡が残る。一方、内面にはタテ方向のナデがやや右に傾いてほどこされる。突帯の突出度は低く、断面形状は低い台形を呈する。また、突帯は波打ち、ヨコナデの隙間から断続ナデによる貼付痕跡が観察できる。3は最下段の破片である。残存部の最大径16.0cm、器壁の厚さは1.4～1.9cmを測る。外面は、左上がりのナデ調整の後に目の粗いタテハケをほどこし、底部には余分な粘土を削り取った痕跡がみられる。また、外面上部にはヨコナデがみられることから、突帯間隔は8cm程度と推測される。一方、内面にはやや左に傾く縦方向のナデ調整がほどこされるが、粘土紐の接合痕跡が部分的に残る。4～9は細片であるが、外面調整はタテハケ、内面調整はナデもしくはハケであることが確認できる。4は口縁端部をナデ調整するが、折曲等はなく単調におさまる。5も口縁部の破片と思われるが、摩滅が激しく端部の形状までははっきりしない。7は突帯部の破片であり、1・2同様、突出度の低い断面形状が台形の突帯をもつ。これらの細片はどれも焼成は良好で、やはり黒斑を確認できるものはない。

10は蓋形埴輪の立飾部の破片とみられる。墳丘北側の標高150.5m付近の斜面上にて採集されたもので、採集埴輪の中では最も高い位置にあり、本来は埴輪頂部に置かれていたものと推測される。厚さは最大で1.4cmを測る。器面の摩滅が激しいが、表面にはナデ調整がほどこされている。頂辺に切れ込みを入れて鱗部を作り出す型式とみられる。一方の面には切れ込み

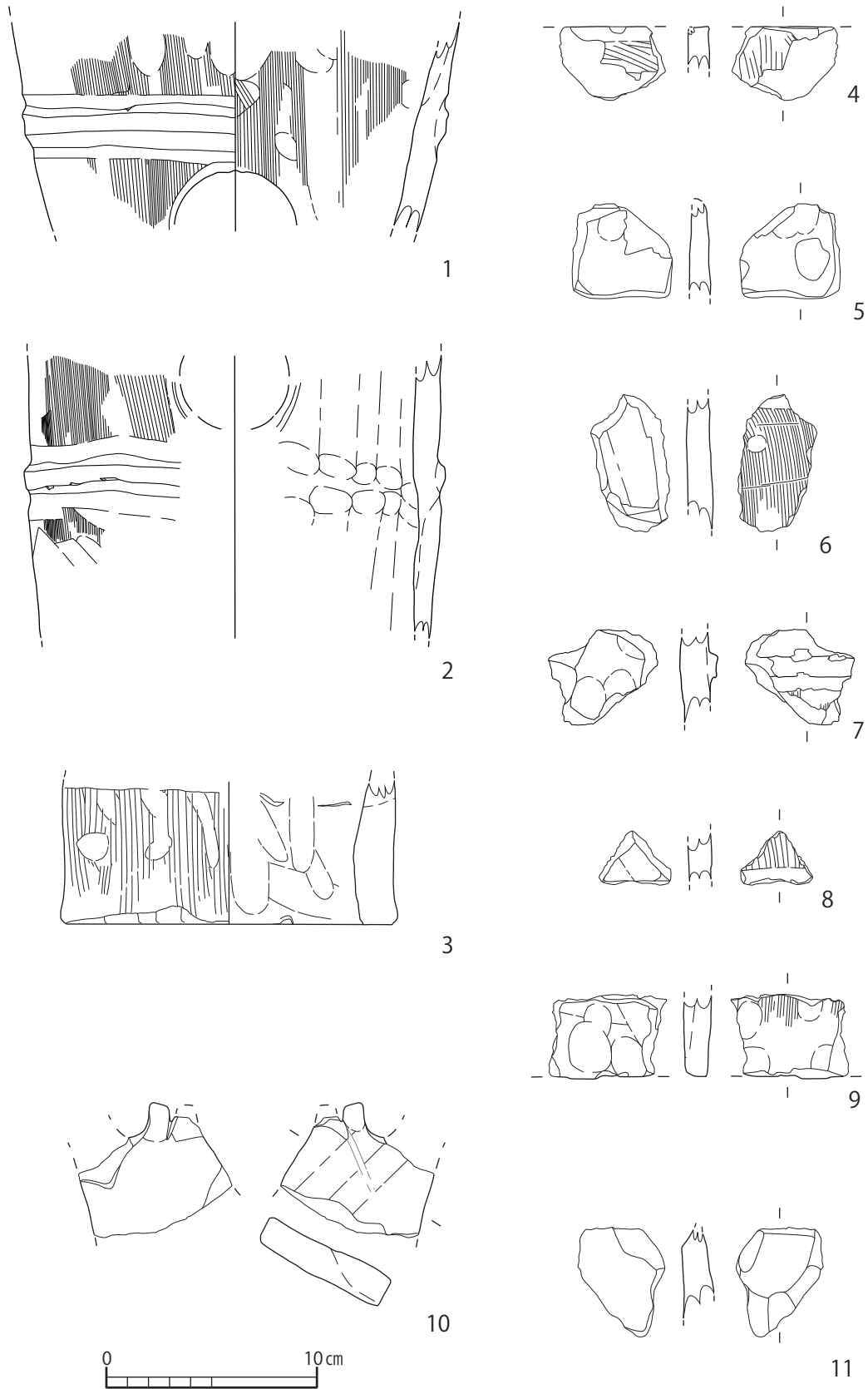


図5 福塚古墳採集埴輪実測図 (S=1/3)



図6 福塚古墳採集の埴輪

部から延びる沈線が確認できるが、もう一方の面にはそれがみられない。焼成は良好で、黒斑は確認できない。

11は器種不明であるが、器面の一部が不自然に屈曲することや一部に折損したような痕跡がみられることから、何かしらの形象埴輪片ではないかと考える。器面の摩滅は激しく、調整痕等の観察は難しい。焼成は良好で、黒斑はみられない。(鈴木康大)

表1 福塚古墳採集遺物埴輪観察表

No	器種	残存高 (cm)	器壁の厚さ (cm)	最大径 (cm)	調整		突帯断面	透孔	胎土	色調	備考
					外面	内面					
1	円筒埴輪	9.9	0.9~1.3 (突帯で1.4~1.5)	21.2	タテハケ	タテナデ+ タテハケ	M字形	円形	径0.3~3.0mmの白色 砂粒をやや多く含む	浅黄橙色	
2	円筒埴輪	13.4	1.6~2.7 (突帯で4.0)	20.0	タテハケ+底 部板オサエ	タテナデ	低台形	円形	径0.1~3.5mmの白色 砂粒をやや多く含む	褐色~橙色	
3	円筒埴輪	7.1	1.4~1.9	16.0	タテナデ+タ テハケ	タテナデ	-	-	径0.1~1.0mmの白色 砂粒を含む	にぶい黄褐	底部残存
4	円筒埴輪	4.0	1.0	-	タテハケ	ハケ+ヨコ ナデ	-	-	径0.1~0.5mmの白色 粒を多く含む	橙色	口縁部残存
5	円筒埴輪	4.5	1.0	-	-	-	-	-	径0.5~2.5mmの白色 砂粒を含む	浅黄橙色	口縁部片?
6	円筒埴輪	6.5	1.2	-	タテハケ	タテナデ	-	-	径0.5~2.0mmの白色 砂粒を多く含む	浅黄橙色	
7	円筒埴輪	4.5	1.3	-	タテハケ	ナデ	低いM字形	-	径0.1~2.0mmの白色 砂粒を多く含む	灰黄褐	突帯付近
8	円筒埴輪	2.5	1.1	-	タテハケ	タテナデ	-	-	径0.1~2.0mmの白色 砂粒を多く含む	橙色	突帯付近
9	円筒埴輪	4.0	1.3	-	タテハケ	ナデ	-	-	径0.5~4.0mmの白色 砂粒を多く含む	浅黄橙色	底部残存
10	蓋形埴輪	6.3	1.5~1.6	-	ナデ	-	-	-	径0.1~1.0mmの白色 砂粒を非常に多く含	浅黄橙色	立脚部か
11	形象埴輪	5.2	1.4	-	-	-	-	-	径0.3~2.0mmの白色 砂粒を多く含む	橙色	不明形象埴輪
12	土師皿	1.35	0.45	-	ナデ	ナデ	-	-	径0.5~1.0mmの白色 砂粒をわずかに含む	明褐色	中世の遺物

「-」は資料から観察できないことを示す

4. 福塚古墳の埴輪の位置づけ

残存状況が良好な円筒埴輪1・2は、外面調整のタテハケが主軸を左方向に傾ける点、突帯は扁平でヨコナデの隙間から断続ナデによる貼付け痕跡が観察できる(断続ナデ技法A)こと、2では底部調整に板オサエが施されていることから、典型的なV群円筒埴輪として理解できる。細片だが4~9も同様にV群円筒埴輪の一部とみて問題ない。その時期は、外面調整にヨコハケが一切確認できず、10の蓋形埴輪立飾も一部に線刻が残るものの、ほぼ無文であることから、MT15型式期以降の所産と推測される。

当該期の南山城地域では、木津川市音乗谷古墳(高橋編2005)や城陽市青山1号墳(高橋1993)のように、V群円筒埴輪のなかでも、器形が直立気味で、突帯の突出度が高く、透孔は連続する段に直交させて配置する特徴を有する埴輪の採用例が多く、それらの一群では底部調整の施工が低調である。これに対して福塚古墳例は、現状では資料数が少なく、系統上の位置づけは難しいものの、器形は上方に向かって開く傾向が看取できることに加えて、突帯も扁平化が著しく、底部調整もしっかりと施されている点で、上記の一群からはやや距離をおくものとみられる。断続ナデ技法Bが未確認であることや地理的環境を考慮すると、奈良盆地北部の菅原東窯(奈良市教育委員会1992)を中心とする系統から影響をうけた可能性が考えられよう。

ただし、底部3は器壁が厚く底部調整も明瞭ではなく、外面調整は強いユビナデの後にほぼ垂直方向にタテハケを施す点でやや異質であり、あるいは共伴するV群円筒埴輪とは系統を異にする可能性もある。福塚古墳の埴輪の全体構成については、今後、資料の増加を待って検討を深める必要がある。(廣瀬寛)

5. 福塚古墳の意義

最初にも述べたように、福塚古墳は中期、あるいは前期の古墳とされていたが、採集埴輪の検討から後期前半、6世紀前半に位置づけられることがあきらかになった。かつて『和東地域の歴史と文化遺産』において福塚古墳を前期とした記述は誤りとして訂正しておきたい。埋葬施設についても、この時代の文脈の中で考えることが必要となるが、崖面に露出した部分での観察からは一般的な横穴式石室とは異なることが想定され、竪穴系横口式石室あるいは竪穴系小石室などの可能性も考えられる。また、この埋葬施設が墳丘の中心から外れることがわかり、過渡的な様相のみられる後期前半の古墳でもあり、異なる種類の埋葬施設が共存する可能性もある。このように不確定な点は多く残されるものの、埴輪から時期がほぼ明らかになったことは大きな成果であり、和東地域の古墳を理解する上でも進展をもたらすものと評価できる。

福塚古墳の近くには、園大塚古墳と原山古墳がかつて存在していた。そのうち、園大塚古墳の実態はまったく不明であるが、原山古墳は出土品が京都国立博物館の所蔵となっていることから、その年代についての手がかりも得られており、横矧板鋌留短甲、衝角付冑のセットから5世紀後半の年代が導き出される。また、『京都府遺跡地図』には円墳として「径 12.5 m（水田畦畔から推定）」と記載する（京都府教育委員会 1985）が、現況ではまったく手がかりがない。ともかく、福塚古墳に先行する古墳であり、円墳があいついで築造されたことになる。園大塚古墳については、1981年の「相楽郡村誌」の園村の記載が手がかりである。陵墓の項に「大墓 土人鏡塚或ハミヤト塚ト称ス。村ノ東南ニアリ、周囲凡五十間。山城志曰、



図7 福塚古墳と周辺の古墳（昭和49年和東町作成2500分1地形図を50%縮小）

在園村、土人云敦躬親王墓ト。然モ今攷フヘカラス。」とあり、同じ記載に、天満宮が「村ノ東」とあることから、「村の東南」とする大墓は天満宮の南にあった園大塚古墳を指すと考えられる。周囲 50 間 (90 m) については、直径ではなく文字通り墳丘の周囲と考え、鏡塚の語から円墳と仮定すると、円周が 90 m で直径 30 m 弱となる。憶測を重ねた議論ではあるが、原山古墳や福塚古墳と同様の円墳がさらにもう 1 基あったことが復原でき、相前後して大型円墳が築造されたとみることも可能ではある。

福塚古墳の年代が明らかになったことから、和束地域における首長墳の築造がある程度まとまった時期にあることが想定できるようになってきた。これはこの地域の開発の時期を示すとともに、この地域の重要性が意識されはじめたことを示していると考えられる。これまでも議論されてきたように、和束谷は大和から近江の信楽に抜ける捷徑であり、信楽からはさらに伊賀、伊勢方面というように東方へつながる交通の要地である。こうした陸上交通路の整備と和束谷の開発が軌を一にすると考えられ、それを象徴する記念碑的な意義を福塚古墳がもっていると評価できる。(菱田)

参考文献

- 乾幸次 1995 「和束町の古墳」『和束町史』第 1 巻 和束町
- 奥村清一郎 1996 「南山城の後期古墳 (6)」『京都考古』第 81 号
- 京都府教育委員会 1961 『京都府文化財調査報告』第 22 冊 同委員会
- 京都府教育委員会 1985 『京都府遺跡地図』第 5 分冊 同委員会
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2020 「和束町和束天満宮周辺の考古学調査」『京都府立大学文学部歴史学
科フィールド調査集報』第 6 号
- 高橋克壽編 2005 『奈良山発掘調査報告 I』奈良文化財研究所学報第 72 冊
- 高橋美久二 1993 「城陽市青山 1 号墳の埴輪 (1)」『京都府立山城郷土資料館報』第 11 号
- 中島正 2017 「南山城における横穴式石室の導入と展開」『古代寺院造営の考古学—南山城における仏教の受
容と展開—』同成社
- 奈良市教育委員会 1992 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 3 年度 同委員会
- 菱田哲郎 2015 「和束川流域の古墳」『和束地域の歴史と文化遺産』(京都府立大学文化遺産叢書第 9 集)